

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 26

## \*ズヴェーヴォと『ゼーノの意識』(La coscienza di Zeno, 1923)\*

堤 康徳

トリエステのアッティリオ・オルティス図書館の正面、オルティス広場に、イタロ・ズヴェーヴォの等身大の銅像がある。左手に帽子をもち、右小脇に書物をかかえ、両足をそろえて直立の姿勢で立っている。ズヴェーヴォが足しげく通った図書館に、ちょうど着いたところが表現されているのだろうか。2004年に設置されたこのブロンズ像の製作者は、トリエステ出身の彫刻家ニーノ・スパニョーリ。やはりトリエステ市内に設置されたサーバとジョイスの像も彼が手がけている。1928年に書かれたズヴェーヴォの『自伝』(一人称ではなく、イタロ・ズヴェーヴォの名で書かれている)には、この図書館について以下のような記述がある。



【イタロ・ズヴェーヴォの銅像】

イタロ・ズヴェーヴォの銀行での生活は、彼の最初の小説『ある人生』の一部で詳しく記述されている。その部分はまさしく伝記的である。そこには、市立図書館で過ごした夜ごとの2時間についても記述されている。ようやく、イタリ

ア文化を少々身につけることができたのだ。何年にもわたり、マキヤヴェツリ、グイッチャルディーニ、ポッカッチョとともに数時間を過ごしたのだった (Italo Svevo, *Profilo autobiografico*, in ID., *Racconti e scritti autobiografici*, Milano, Mondadori, 2004, pp. 800-801)。

ズヴェーヴォは、1880年から20年近く、ウィーンに本店のあるウニオンバンクのトリエステ支店で働いていたが、勤務を終えてから連日のように市立図書館に立ち寄り、読書に没頭できる貴重な時間を過ごしていたようだ。

1793年に創立されたトリエステ市立図書館は、14世紀から19世紀の外交文書などの市の歴史的資料を中心に所蔵する。現在は、1873年から半世紀にわたり館長を務めた文献学者のアッティリオ・オルティスの名が冠されている。

ズヴェーヴォの像のつま先の前には、石畳にプレートが埋めこまれ、以下の文字が刻まれている。

La vita non è né brutta né bella,  
ma è originale!

“La coscienza di Zeno”, cap. 7

ITALO SVEVO

1861- 1928

ズヴェーヴォの代表作『ゼーノの意識』第7章

の一文「人生は醜くも美しくもなく、不条理である」がここに引用されているのである。この文章について検討する前に、彼の遺した3つの小説について簡単に振り返ってみよう。



【イタロ・ズヴェーヴォのプレート】

### 『ある人生』(Una vita, 1892)

ズヴェーヴォの小説の主人公たちは、兄弟のように似ている。いずれも、夢と現実との境界を見失いがちで、社会への適応性を欠く無気力な男たちである。彼らはまた、ほぼ同時代の、ジョヴァンニ・ヴェルガとフェデリーゴ・トッツィの描いた主人公たちと同じく、現実との葛藤に敗れた「敗者たち」でもある。ヴェルガ、ズヴェーヴォ、トッツィはいずれも、フランスの自然主義の文学の成果を取り入れながら、それを超える独自の道を模索した作家たちだといえよう。

1892年に出版された最初の長篇小説『ある人生』に、作者は当初、『無能力者』(Un inetto)という題名を考えていたが、出版社の反対にあい、変更を余儀なくされた。

主人公は、アルフォンソ・ニッティという名の、22歳の青年である。カルソの僻村の出身で、トリエステのマラー銀行で働いているが、銀行の仕事にはまったく意欲がわかず、市立図書館での読書と、哲学的な著作の執筆に日常生活の希望をつないでいる。主人公は、銀行の頭取の家で、その娘アンネッタと知り合う。やがてアルフォンソは、高慢で虚栄心の強いアンネッタが、意外にも自分に関心をもっていることを知る。文学に関心をもつ彼女が、共同で小説を執筆することを彼に提案する。その作業を通じてふたりはしだいに親密になり、ある夜、彼は彼女の体を奪う。アンネッタの希望でいったん実家に帰省したアルフォンソは、重い心臓病で病床にある母親と再会する。小説の

共同執筆において、一般的な成功を求める彼女と、芸術性を重んじるアルフォンソのあいだには、すでに齟齬が生じていたが、肉体関係を契機にそれがいっそう強く意識され、アルフォンソはアンネッタとの結婚を思い悩む。母の死後、トリエステに戻ったアルフォンソは、アンネッタが彼女のいとこと婚約したことを知る。彼女の父は、アルフォンソを、まるでゆすりかたかりのようにみなし、彼を娘から遠ざけ、銀行でも冷遇する。誤解を解くためにアルフォンソが望んだアンネッタとの待ち合わせに、彼女の兄が現れ、アルフォンソを罵倒する。兄を送りつけたのがアンネッタだと思い、アルフォンソは絶望のあまり自殺する。

### 『老年』(Senilità, 1898)

登場人物の多い『ある人生』とはことなり、『老年』の主要登場人物は、くつきりとしたコントラストを作る4人の男女にしぼられている。この作品の主人公エミーリオ・ブレンターニの置かれた境遇は、『ある人生』のアルフォンソと似ている。しかしアルフォンソの職場の環境や仕事の内容が細かく描かれるのにはたいし、エミーリオの勤める会社や、彼の仕事や同僚にかんする具体的な記述はいっさいない。小説には、トリエステの印象的な風景描写もちりばめられているが、叙述の中心となるのは、エミーリオを中心とする主要登場人物たちの心理である。その心理描写は前作以上に深化される。作者が探求するのは、脈絡のない意識の流れではなく、いわば、複雑に屈折する心理状態のメカニズムと、環境や言動との関連性である。すべての心理が説明可能であり、記述可能であるという自負が、『老年』の文体からは伝わってくるように思われる。たとえば、徹底的に追求されるエミーリオの嫉妬の分析がその好例である。男の嫉妬をここまで深くえぐった小説は、イタリアにかぎらず、ほかにあまり類がないのではないだろうか。アルコール依存症のアマーリアの病状も、科学者のような作者の観察眼によって執拗に分析されている。まるで、彼女の妄想のなかにさえ、論理性を見出そうとするかのように。妄想のなかに架空の恋敵をつくりあげる妹アマーリアの病は、百年後のわれわれの孤独と精神の闇を告知している。

本書のテーマのひとつが、「古い」、とりわけ精神的な老いであることはたしかである。エミーリオは 35 歳にして、すでに老成した思考(mente senile)をもっている。「自らの青春を振り返る老人のように、エミーリオはたえず彼女のことを考えていた」という一文に、この主題が集約されている。アンジョリーナとのアヴァンチュールは、エミーリオの人生で二度と訪れることのない謝肉祭(カーニヴァル)であり、それ以前も、それ以降も、単調な灰色の時間が流れているにすぎない。

#### 『ゼーノの意識』(*La coscienza di Zeno*, 1923)

本作は、精神分析医に勧められて書いた患者の自伝という形式をとる。この患者、すなわち主人公のゼーノ・コシーニが綴る人生のエピソードは、時系列的には配列されていない。語られる内容は、何度も試みては失敗する主人公の禁煙、軋轢のあった父親の死、妻と愛人、義兄の事業の失敗と自殺のことなどである。

ゼーノはトリエステの豊かな商人の息子であり、父親の意思に従って家業を手伝ってはいるが、父親は息子を信用しておらず、家業の経営を息子ではなく、第三者のオリーヴィにゆだねる。父の死後、有能な実業家であり、よき家庭人であるジョヴァンニ・マルフェンティを知り、彼を尊敬するようになる。ジョヴァンニの 4 人の娘のうち、ゼーノは長女のアーダの美しさに惹かれ、好意を示すが、アーダはそれに向いてこたえない。結局、ゼーノは、初対面のときに、驚くほど醜いとさえ思っていた次女のアウグスタと結婚する。

彼は妻を愛する一方で、「結婚生活の倦怠」から逃れるために、カルラという若い娘を愛人とする。その関係は、彼女が、声楽の教師(ゼーノがトリエステのなかで最も月謝の安いという理由で彼女に紹介した)と結ばれるまで続く。

アーダの愛を勝ち得たのは、ゼーノと好対照に、外見もよく、バイオリンの才能にも恵まれたグイードであった。しかしグイードとの結婚は、アーダを幸せにはしなかった。

アーダは双子を帝王切開で産んでから、バセドウ氏病にかかり、かつての美貌が見る影もなく衰えてゆく。その様子をゼーノは克明に記録する(「病」がこの小説のテーマでもあるので)。また、

夫のグイードは彼女を裏切り、秘書のカルメンを愛人としている。グイードは事業に失敗して多額の借金を抱え、妻に借金の無心をするために、狂言自殺を図るが、睡眠薬(1904年にドイツのバイエルン社が開発したヴェロナール)の服用量をまちがえて死んでしまう。グイードもまたひとりの「無能力者」として描かれるのである。

『ゼーノの意識』でも、恋愛感情や嫉妬について語られるはするが、前2作がそれらを扱ったさいの激しさが削ぎ落とされ、皮肉がより顕著になる。

ズヴェーヴォは『自伝』のなかでこう書いている。「ゼーノは明らかに、エミーリオ(『老年』の主人公)とアルフォンソ(『ある人生』の主人公)の兄である。彼らとちがうのは、年齢がずっと上であることと裕福であることだ。自らの人生のために闘争する必要はなく、他人の闘争を休んで眺めていられる立場にある。しかし、それに参加できないことに大きな不幸を感じている。おそらく他のふたりよりもまだ無気力である」。「この小説は彼の人生とその治療の物語である」。

銅像のパネルに刻まれた引用句に話を戻そう。この句のある第7章は「会社の話」と題されている。この章では、グイードの経営者としての無能力さと自殺にいたる経緯、アーダの病状が中心に語られる。仕事における損失と、妻との不和に頭を悩ますグイードは、ゼーノとの散歩中にふとこう心情をもらす。「人生は不公平でつらい！」これにたいするゼーノの返事が「人生は醜くも美しくもなく不条理(originale)である！」なのである。ズヴェーヴォ研究者として名高い批評家のブルーノ・マイエルによれば、originale は「独創的」というよりは、「風変わり」「不条理な」「予測不可能な」「偶発的」という意味だという(Italo Svevo, *La coscienza di Zeno*, a cura di Bruno Maier, Milano, Mursia, 1986, p. 354, nota 227)。この主人公の言葉には、『ゼーノの意識』の主題のひとつ——予想外の値動きをする株や商品の相場のように、偶然に左右されて浮き沈みを繰り返し、誰も想像もしなかった皮肉な展開を見せる人間の生の滑稽さと悲しみ——が凝縮されているのかもしれない。

(上智大学講師)

## 映画からわかるイタリア

二宮 大輔

「サヴェリオ・クリスポは想像上の人物ですが、あの時代のイタリア映画は実在のものです。」

クリスティーナ・コメンチーニ監督の映画『ラテン・ラバー』(Latin Lover, 2015)のエンドロールに挿入された一文だ。イタリア映画史に名を残す俳優サヴェリオの死後十年の式典に際して、彼の生家であるプーリアの邸宅に集まった女たち。派手な私生活を送っていた彼は、妻や愛人の間に、国籍の異なる五人の娘を残したのだった。お互いに微妙な関係を保つ娘たちと元妻たちが、サヴェリオの面影とともに、華々しいイタリア映画の黄金時代を振り返る。もちろん、サヴェリオ・クリスポは想像上の人物だが、その姿はマルチェッロ・マストロヤンニなど、往年のスターを連想させる。つまりこの作品はイタリア映画そのものへのオマージュとなっているのだ。

手前味噌な話だが、この『ラテン・ラバー』を含む三本の新作イタリア映画を上映する「映画で旅するイタリア」という上映会を、私の所属する京都ドーナツクラブが企画した。時期は6月24日から一週間、場所は烏丸の京都シネマだ。イタリアの配給会社と契約を交わし、上映素材を送ってもらい、字幕をつけ、スポンサーを募り宣伝をしつつ、映画館と交渉する。とんでもない労力を要する割に実入りの少ないこの一大事業に参加する思いは所属メンバーそれぞれだろうが、私の場合は、これらの映画を通して今のイタリアを理解したいという気持ち強い。

ローマ第三大学で現代文学を専攻していた私は、試験の課題となる文芸批評や小説に飽きると、憂さ晴らしに映画館に足を運んだ。本は自分で能動的に読み進めないと理解できないが、映画はこちらのんびり椅子に座っているだけで、どんど

ん進行していく。当時はこれがとても楽に感じだし、今をもって映画は研究対象などなくてエンターテインメントという意識が強い。だが、その一方で、今のイタリアがよりよくわかるのは、文学でも演劇でもなく、映画だということにも気付いた。主題やストーリーだけでなく、イタリア映画の中に映り込んだ建物や人や町は、紛れもなく「今」撮影されたものであり、はっきりと可視化されたそれらは、他の媒体よりもダイレクトにイタリアを伝えてくれる。



【映画『ラテン・ラバー』】

だから今回の「映画で旅するイタリア」では過去の名作ではなく、新作を持ち込みたかった。『ラテン・ラバー』のほかに上映するのは、名優エリオ・ジェルマーノを主演にすえた激動のラブストーリー『アラスカ』(Alaska, 2015)、怪盗二人組のコメディ『やつらって、誰?』(Loro chi?, 2015)。権利の関係などがあり、上映する三本は2015年に本国で公開された「準旧作」ではあるが、今のイタリアを映し出しているという意味では、もってこいの三本だと思っている。どのあたりがもってこいなのかを理解するために、イタリア映画の近況をご説明したい。





【映画『アラスカ』場面】

## 1. Un'Italia bella e perduta

美しく失われたイタリア。昨年のイタリア映画祭で上映されたピエトロ・マルチェット監督の『失われた美』(Bella e perduta, 2015)は、ここ二十年のイタリア映画の最高傑作であり、フェリーニやヴィスコンティといった巨匠と同列に並べてもなんら遜色がない。

犯罪組織のゴミの大量不法投棄、そこから派生する環境汚染が深刻な問題となっているカンパーニア州の通称「炎の大地」(Terra dei fuochi)で、ブルボン王朝遺構の守衛をしていたトンマーゾ・チェストローネは、2013年のクリスマスの夜に突然死してしまう。善意で守衛をしていた彼が大事に育てていた水牛を、個人の遺志を継ぎ、屠殺から救うために一人の道化師(プルチネッタ)が旅に連れていく。

ドキュメンタリーに詩的なロードムービーを掛け合わせたような不思議な作品で、水牛がトラックに乗せられて連れ去られていくラストシーンも切なくて胸に迫るものがある。

まさにこの映画では、政治の腐敗、宗教の腐敗、犯罪組織の跋扈、情報処理の発達による倫理観の変容など、様々な要因が相まって、失われてしまった美しきイタリアが象徴的に映し出されている。こういった主題は、映画に限らず、イタリアの芸術的表現の最先端で、ちょっとした流行りになっているように思う。

そして「映画で旅するイタリア」で上映する『ラテン・ラバー』も、華やかだった50年代・60年代の映画に思いを馳せ、現在を顧みる作品。形こそ違えど、『失われた美』とテーマが重なる部分があるだろう。それは、映画評論家の男が壇上で「最近の映画がどんなに退屈になったかわかりでしょう

か」と、さり気なくぼやいている場面などからも、うかがい知れる。

## 2. 新ジャンルのような旧ジャンルたち

17世紀のナポリの民話集ペンタメローネをベースにしたファンタジー作品 マッテオ・ガローネ監督『五日物語』(Il racconto dei racconti, 2015)や、冴えない少年が超能力に目覚めるガブリエーレ・サルヴァトーレス監督『透明の少年』(Il ragazzo invisibile, 2014)など、今までに例を見なかったジャンルものを撮影するようになったのが、近年のイタリア映画の第二の特徴だ。中でも2016年のガブリエーレ・マイネッティ監督『皆はこう呼んだ、鋼鉄ジグ』(Lo chiamavano Jeeg Robot)とマッテオ・ロヴェーレ監督『ゴッド・スピード・ユー』(Veloce come il vento)は、興行的にも大きな成功を収めた。

『鋼鉄ジグ』はローマ郊外に住むチンピラが放射能を浴びることで超人的な力を身に付け、戸惑いながらも悪に立ち向かっていく。マイネッティは日本のアニメをキーワードにした短編をすでに二作撮影しており、今回は周りの反対を押し切り、同路線で長編制作を敢行。低予算ではあるが、公開と共に大きな反響を呼んだ。現在は日本でも全国公開が始まっている。

『ゴッド・スピード・ユー』は、人気コメディ『いつだってやめられる』(Smetto quando voglio, 2013)などのプロデューサーとしても知られる新進気鋭のフィルムメーカーのマッテオ・ロヴェーレの長編第三作。イタリアの名ラリー選手カルロ・カポーネの半生を物語の下敷きにしたカーアクションもの。こちらもカーマニアのためだけの映画に留まらず、親子愛を丁寧に描いた佳作と評されている。日本では全国公開されていないものの、DVDとして如何にもカーアクションといった風体の表紙で発売されている。

このようなジャンルものは、芸術性が乏しいとして、一般的に、特にイタリア映画を観るようなシネフィルの間では侮られがちだが、先述の作品はどれも物語がしっかり作り込まれており、決して安っぽいB級映画に陥らない力強さを持っている。先入観を裏切る分、かなりの好印象を持つ人も少なくない。このように、定型のジャンルものが、イタリ

アというフィルターを通すことで、新鮮な試みとして生まれ変わっているのだ。

### 3. クロスオーバーするテレビと映画

今まで映画を撮らなかったテレビマンたちが映画の世界に乗り込み、その一方で、ヒットした映画がテレビドラマされるというテレビと映画のクロスオーバーが、近年のイタリアでは非常によく見受けられるようになった。まず注目を集めたのがローマのギャング団を描いた映画『野良犬たちの掟』(Romanzo criminale, 2005)のドラマ化だ。映画版とドラマ版の大きな違いは、その登場人物の多様さだ。およそ二時間弱で話をまとめなければならない映画に対し、ドラマでは異なる主人公たちの視点が絡み合いながら、シーズン1とシーズン2合わせて二十二話のストーリーが重層的に展開する。

それに倣って大ヒットしたのがドラマ版『ゴモラ』。ロベルト・サヴィアーノ原作、マッテオ・ガローネ監督の同名映画(Gomorra, 2008)が、カンヌで審査員特別賞を獲得すると、2014年にナポリの犯罪組織カモッラと、その温床である郊外の集合住宅カンピーアという設定はそのままに、作り替えられたドラマが大ヒット。こちらシーズン1とシーズン2で計24話。

面白いのは内容に合わせて1話の指揮をとる監督が代わるというところ。例えばカモッラの大ボスの妻が主人公となる回は、女性の描き方に定評のあるフランチェスカ・コメンチーニ(余談ではあるが、彼女は『ラテン・ラバー』の監督クリスティーナ・コメンチーニの娘だ。イタリア式喜劇の巨匠ルイージ・コメンチーニの娘は四人とも映画の道に進んだ)が担当するといった具合だ。このドラマの監督の一人だったのが、「映画で旅するイタリア」で上映する『アラスカ』を撮影したクラウディオ・クペッリーニ。彼はゴモラの荒廃した世界観をそのままに、転落しては再生する若い二人の恋愛映画を一本作り上げた。

そして『やつらって、誰?』の監督フランチェスコ・ミッチケもまた、テレビドラマ出身の監督である。映画の中で次々と畳みかけられるトリックは、興味のない視聴者を引き込むテレビならではのスピ

ード感を思わせる。新しい才能がテレビ界で花開き、映画を盛り上げている。

そして最後に、今あげた監督たちが30代から40代の若い世代の監督であることも付け加えておきたい。つまり円熟の域に達し、新たな傑作を彼らが生み出してくれるのはこれからのことだ。大きな変化を巻き込みながら、今また新たなイタリア映画が産声を上げようとしている。



【映画『やつらって、誰?』】

(京都ドーナツクラブ映画担当/当館元受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>